

わたしの聖戦

◎◎女性が働くということ◎◎ 98

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

市川海老蔵事件に思う

市川海老蔵の暴行事件には本当にびっくりした。事件そのものへの驚きというより、過熱した報道に辟易したのだ。それだけ話題になるのは、彼が大物だからこそと思いつつ、しかし、いわば単なる酔っ払い同士の喧嘩にあれだけの時間と労力を割くマスコミのあり様はちよつと異常ではないだろうか。

は正當に償わなければならぬ。が、それとは別のところで何がしか世間の「裁き」が肅々と進んでいるようで気味が悪かった。昼間、テレビ番組の大半はニュースとワイドショーで占められている。夜はバラエティーか。普段からどのチャンネルを回しても同じ内容の報道が目につくが、今回もすべての局が集中して放送するため、それぞれの独自性や客観性は影を潜めてしまった。ほとぼりが冷めるまで来る日も来る日もほとんど同じテーマや類似のコメントが続く。うんざりである。

そうこうしている間に世界は動いている。テロがあり、内紛があり、難民がいて、飢餓がある。ぼんやりと一日テレビの前に座っていると本当に大事なことが見えなくなるのではないかという微かな恐怖に駆られる。

昼間、テレビ番組の大半はニュースとワイドショーで占められている。夜は……



たとえば、ドイツがまだ東西に分断されていたころ、信じられないほどの過激さで国家が国民を監視していた事実を、私は映画「善き人のためのソナタ」で知った。ベルリンの壁が崩壊した意義を改めて学んだ。

また、ユダヤ人の中には、唯一黒人のエチオピア系ユダヤ人がいるが、1984年、エチオピアを襲った大飢饉をきっかけにかねてからイスラエルに帰りがついていた彼らをイスラエルへ輸送するという大規模な試みがあった。これをモーセ作戦と呼ぶ。私はこの一連の事実を、やはり映画「約束の旅路」で知った。

福祉の国と違ったイメージが強いスウェーデンが、実はレイプと人身売買の類々な国であり、思いのほか女性蔑視が根強いことは小説「ミレニアム」で、第二次世界大戦のドイツ占領下にあったフランスで、ユダヤ人を連行したのはドイツ兵ではなくフランス兵であったというが、これも小説「サラの

鍵」が教えてくれた。もつと知らないことは山のようにあるだろう。今知らなければならぬ出来事もたくさん存在するに違いない。しかし、それらは時事的な報道からは得られない。特にテレビはごく一部の業界人に選ばれた、非常に偏った内容しか取りあげない。文化大革命は中国では教えないと聞いた。また、最初のころイラク戦争について、アメリカ国民はほとんど知らされていなかったとも。どこの国も同じ程度なのだろうか。そう考えると、小説や映画の果たす役割はとて大きい。最近の本も読まない、映画も限られたものしか見ない人が多いと聞く。私たちの脳みそはどんどん軽くなつていくように思えてならない。

イラスト・三浦義雄